

張大千 (1899～1983)

四川省内江の出身。書画家、篆刻家、詩人。

名は正権、後に爰、字は季爰、号は大千居士など。
「中国伝統絵画の大百科全書」といわれた。

中国の伝統芸術を現代に甦らせた芸術家。賤作者としても有名。

古典的な中国画の技法と現代の新しい技法を融合させて、西洋与中国の融合に挑戦した。

山水画、花卉画が得意。とくに蓮の花の絵が独特である。晩年は水墨画に専念し、潑墨という技法、破墨を彩色に応用した（潑墨潑彩）。

徐悲鴻から500年に1人の画家と称賛された、国際的な芸術家である。

1917年（18歳）京都へ留学し3年間、染色を学んだ。

1940年（41歳）から2年7ヶ月間、敦煌の莫高窟に住み込み、壁画の模写に専念。

1948年（49歳）香港に移住。その後、台湾、インド、ブラジル、アメリカなど国外に20年以上滞在した。

1951年（52歳）アルゼンチンに移住。

1953年（54歳）ブラジルに移住。

印象派やキュービズムの影響を受け、中国画に西洋の技法を取り入れる。

ピカソに会いに行ったりした。

1978年（79歳）台湾に移住。台北に住み、そこで死んだ。



ピカソと



張大千「行書七言對聯」1947年
紙本 161.5×30 cm×2
「常記高人右丞句」「爲憶名言玉局翁」
款識：集進道青玉案、晦庵鷓鴣天句、書於大風堂下。立己仁兄法家正之、丁亥十月大千張爰。



張大千「秋爲人清」紙本 97.6×45 cm 扁額

款識：蜀人 張爰



張大千「銳齊健圓」

玉川堂の筆について、筆の四徳（名筆の四つの性質）について書いたもの。これは山馬筆で揮毫したようだ。

「先が鋭い、そろっている、弾力がある、よく回転する」

款識：玉川堂名筆、蜀人張大千題贈。

お世辞に過ぎないだろう。筆屋の宣伝である。粉飾。



張大千「廬山図巻」1981年 180×1008 cm 台北故宮博物院張大千紀念館蔵 淚墨澆彩画法による表現



張大千「黃山雲海」1981年 絹本 50×89 cm



張大千「澆彩山水」1953年 144×356 cm
抽象表現主義の影響をうけている。



張大千「紅衣達磨」1944 年作
紙本 75.5×49 cm



張大仙「梅花仕女」軸 98×41 cm



張大千「春曉讀經」1948 年作
團扇 絹本 直徑 24.5 cm



張大千「蘭花」1963 年作
絹本 直徑 20 cm

款識：癸卯之八月爰翁



張大千「蘭草」1948 年作 團扇 直徑 26 cm
款識：戊子十月写似 藕姑夫人大家法正 蜀人
張大千爰 鈐印：張爰之印 大千



張大仙「溪山遠眺并行書」1948 年作 成扇

款識：（書）虎豹耽之守……游仙詩并爲孟
和仁兄法教張爰。



張大千「蓮」1979 年作



張大千「水殿暗香」1981 年作 紙本 橫幅 75×142 cm



張大千「澆彩荷花」紙本 56×91 cm

愛新覺羅溥儒

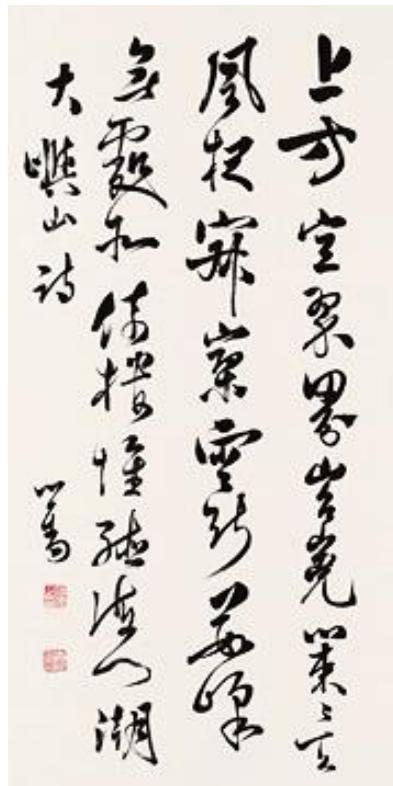
(1896~1963) 北京出身

清朝宗室の出身。

溥儀の従兄弟。名は儒、字は心畬、号は西山逸士。

画家、学者、書と詩も優れ詩書画三絶と称された。国立北京芸術専科学校教授。辛亥革命後は、北京の西山台戒寺に隠棲し、読書と書画の研究をした。

山水は北宋の大家に学び、山水を得意とした南方の張大千と「南張北溥」と併称せられた。



溥儒「行草書軸」紙本 91.5×45.5 cm
釈文：上方空翠界蒼嵬策，天風夜寂寥雲。
断数峰無處取倚樓，惟聽海門潮。大嶼山詩。
大嶼山詩



溥儒「行書七言對聯」
紙本 131×31 cm×2
釈文：人品無瑕玉界尺，文章有骨繡屏風。



溥儒「楷書十五言對聯」
1936年
紙本 132×32 cm×2



溥儒「碧溪清濤水閣涼」
1953年 紙本 53×26 cm



溥儒「居之安」行書 紙本 30×66.5 cm



溥儒「梅花仕女」1947年 紙本 52×135 cm



王國維（1877～1927）浙江省杭州府海寧県の出身

歴史学者「甲骨四堂」の一人。著書に『殷周制度論』など多数ある。

字は靜安また伯隅、号は觀堂。羅振玉の娘婿で弟子。羅振玉とともに甲骨学の基礎を固めた。

1901年、東京理科学院に留学。脚氣のため翌年帰国した。帰国後、上海の学校で哲学、心理学を講義した。

1911年、辛亥革命のため羅振玉とともに日本に亡命。

1925年、清華大学教授に就任。

1927年6月、北京の頤和園の昆明池で入水自殺。



甲骨文（亀の腹甲内面骨）

甲骨文字は殷代（紀元前1300年～紀元前1000年頃）に使用されていた文字である。別名、

殷墟文字、契文、契刻文字、卜辞ともいう。

今までに発見された甲骨は、16万片以上といわれる。甲骨文字の数は4500ほど、そのうち解読されているのが2000字ほどらしい。

董作賓（とうさくひん）（1895～1963）河南省南陽の出身

甲骨学者「甲骨四堂」の一人。書、篆刻も能くした。甲骨学の大成者。字は彥堂、号は平廬。



1928年～37年まで、歴史語言研究所による、殷墟の発掘調査を、李濟とともに主宰した。発掘調査は日中戦争で中断されるまで十数回行われた。調査の結果、『史記』に記載されていた伝説の殷王朝が実在していたことが証明された。彼は、甲骨文字を様式によって、武丁～帝紂までを5期に分類した。また殷代の暦を研究して殷暦を復元し『殷暦譜』を著した（1945年）。その他『甲骨文断代研究例』（1932年）など多くの著作がある。

1948年、台湾大学教授となつた。1951年には国立中央研究院歴史語言研究所所長となつた。



董作賓「甲骨文七言对聯」
1957年 紙本 11×89 cm×2

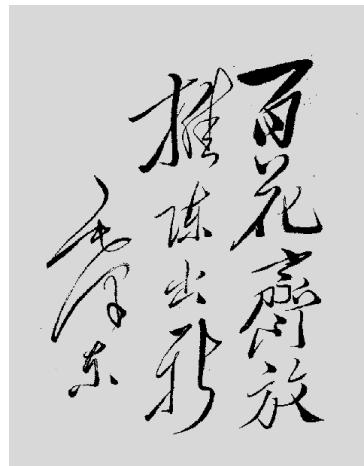
釈文：林泉雨畢魚兒出、
苗圃風和燕子來。



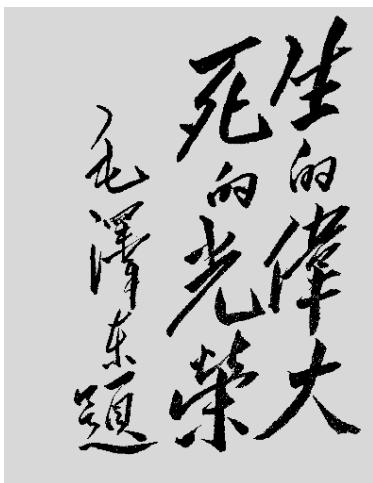
董作賓「甲骨文軸」紙

本 68×32 cm

釈文：無尽好、載酒對
林泉。燕舞花下魚自樂、
朝游川上暮言旋、人月
喜同圓。



「百花齊放、推陳出新。毛澤東」
 「推」は押しやること。「陳」は古いもののこと。「推陳出新」は古いものを捨てて、新しいものを生み出すこと。

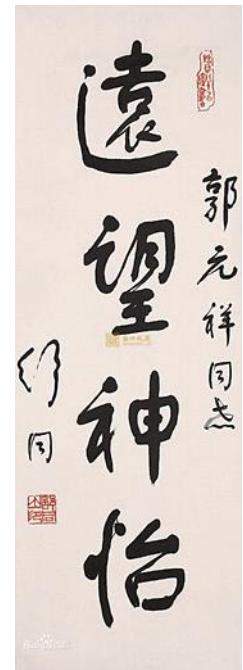


「生的伟大、死的光榮。毛澤東題」
 生きるのは偉大で、死ぬのは光榮という意。



毛澤東 (1893~1976) 湖南省湘潭県韶山冲の出身 政治家、思想家、詩人。

筆名は子任。中国共産党創立党员の一人。中華人民共和国初代国家主席。



毛澤東・舒同・郭沫若の三人を「現代中国の書の三傑」と呼ぶらしい。三人とも政治家であり書家ではない。個性的とは言えなくもないが、この程度で三傑なら書も終焉だ。



舒同 (1905~1998) 江西省東郷県出身 名は文藻、字は宜禄。中国共産党员。紅軍書法などなど。書は「七分半書」また「舒体」、「舒同体」と呼ぶ独自の書法を誇っている。七分半書に意味は、楷行草隸篆の各一部、顔・柳の各一部、何紹基半分の合計ということらしい。



郭沫若 北京「故宮博物院」の看板



郭沫若「蘇州桃花塢木刻年畫」社の看板



郭沫若「紹興魯迅紀念館」の看板



郭沫若「魯迅紀念館」の看板



郭沫若 (1892~1978) 四川省樂山県の出身 政治家、歴史家、文学者

字は鼎堂、筆名（号）は沫若、麥克昂など。節操のない風見鶏のような人物。発見された甲骨全てを分類した『甲骨文合集（第一集）』（1979年に出版）の編集を進めなど、甲骨研究では大きな業績がある。「甲骨四堂」の一人。
 戰後、中国科学院院長に就任。1958年、共産党に入党。1963年、中日友好協会名誉会長に選任されるなど、数々の要職に就いた。中国各地の紀念館などに、彼の揮毫になる看板がある。書風は伝統的俗書である。

吳熙載 (1799~1870)



黃錫禧印



丑發

趙之謙 (1829~1884)



趙之謙印



悲庵

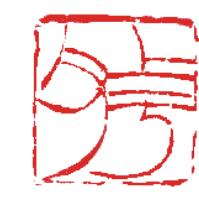
徐三庚 (1826~1890)



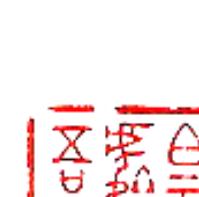
黃山壽印



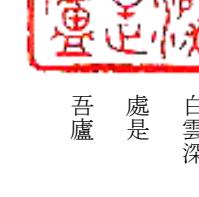
庵久



上于



吾廬



白雲深處是



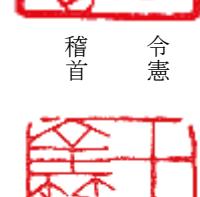
彥武



延年



令憲



十六



金符齋

浙派 (西泠印派)

清代前期に、何震と程邃から学んだ丁敬は浙派（西泠印派）をひらいた。浙派には金農、鄭燮、黃易、奚岡、蔣仁、錢松、陳豫鍾、趙之琛、陳鴻壽、胡震らがいる。

丁敬 (1659~1765) 丁敬は金農と親しく交際した。西泠八家のひとり。



曾觀



館藏



稽首



金符齋



上下釣

魚山人



金農



冬心



先生



百金

一字值



鄭燮



黃易



均古雲



錢唐孫

之印信



徐大士



平



奚岡



生穆

黃易



黃易



錢唐



珍藏



黃易

錢唐

陳鴻壽 (1767~1822) 号は曼生。「曼生壺」を創始した。

西泠八家のひとり。

「曼生壺」を創始した。

西泠八家のひとり。

西泠八家のひとり。

西泠八家のひとり。

西泠八家のひとり。

西泠八家のひとり。

西泠八家のひとり。



問梅



穆生



錢唐孫



均古雲之印信



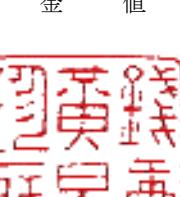
身印



平



一字值



奚岡



黃易

錢唐

趙之琛（次閔）

（1780～1852）西泠八家のひとり。



陳印
鴻壽



雁
魚

胡震

（1817～1860）号は胡鼻山人



胡
鼻山



長宜子孫

（せいれいはらか）

奚岡

（1746～1803）

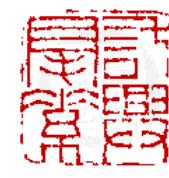
西泠八家のひとり。



金石
癖



龍尾
山房



託興
毫素



我得
靜三昧

蒋仁

（1741～1795）

西泠八家のひとり。



無地
不樂



堂印
蒋山



仲水
過眼



我書
意造
本無法

西泠八家

（せいれいはちか）

丁敬・蔣仁・黃易・奚岡・陳豫鍾・陳鴻壽・趙之琛・錢松の八人のこと。

清代末から民国に、すべての流派が衰え、世間から忘れられてきたころ、丁敬、鄧石如、吳熙載、趙之謙らの篆法を学び、それらを継承し、篆刻藝術に貢献した吳昌碩が吳派が吳派をひらいた。

吳昌碩

（1844～1927）

号は缶廬など。



蘭為
同心



倉
硕



倉碩道
人珍祕



缶記
缶

趙石

（1874～1933）

吳昌碩から学んだ趙石は趙派をひらいた。



長作田
間識
字民



虞山沈氏師
米齋審定金
石文字之印

名は鉄、字は純鉄、号は散木、龕翁など。
人に左右されない独自の篆刻を誇ったが、
誇るほどのものではないだろう。独善的。



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



若死
意苦

齊白石

（1863～1957）

民国から現代にかけ趙之謙らを学んだ齊白石は、
流派をひらく人というより、独立独歩の藝術家であつた。



我負
人々當



跋扈
將軍



若死
意苦



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



若死
意苦



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當



跋扈
將軍



人長
壽



我負
人々當

